

# 先人の知恵から

## 28

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

人間はずっといろいろな困難と向き合い、それを乗り越えてきた。その結果が今である。このコロナウィルス問題も、いずれ乗り越えていくのだろう。人類が生まれ、文明が生まれてからずっと、人々はその知恵を働かせてきた。今回のことが未来の人にとって先人の知恵となる。そんな思いを込めて、今回は下記の9個。

- 五十歩百歩
- 凝っては思案に能わず
- 碁で負けたら将棋で勝て
- 尽く書を信ずれば  
すなわち書なきに如かず
- 琴柱に膠す
- 子供の喧嘩に親が出る
- 子に過ぎたる宝なし
- 子の心親知らず
- 子は親を映す鏡

### <五十歩百歩>

差はあるが、本質的には同じであること。似たり寄ったりであること。出典 孟子

この故事の出典の話は以下の通り。

中国、戦国時代に、梁の恵王が、「自分は凶作の地の人民を豊作の地に移すなど、人民に対していつも心を配っている。これほど他国よりも善政をおこなっているのに、人民は自分を慕って各地から集まってこないのはどうしてだろう？」と孟子に尋ねたとき、孟子は戦争をたとえにして、「鎧、兜や武器を捨てて逃げ出す者がいて、ある者は五十歩退却し、ある者は百歩退却して止まったとします。この時五十歩逃げた者が百歩逃げた者を、自分よりも臆病だと笑ったらどうでしょうか？」と言った。王は「それは間違いだ。五十歩しか逃げなかったからと言って、逃げ出したことには変わりがない」というと、孟子は「王が其の道理を

お分かりであれば、人民の数が隣国よりも多くなることを望みなどしない事です。(人民が苦しむのを凶作のせいにするようでは、他国の政治と大差はありません。)」と答えたという。

どちらでもそう大差ないことで悩んでしまう人に時々会う。

以前、赤ちゃんの体温計のことで、耳で測るのとおでこで測るのとどちらが良いかと聞いてくる人がいた。色々あると悩んでしまうものだ。おでこで測るのは少し高めに出るのだと医療関係者から聞いたことはある。しかしそんなに大差はない。どっちもどっちだろう。使いやすいほうを使えばよい。要は測れば良いのだ。こういうことが時々ある。

誰でも、大きな差があれば選択しやすいが、余り差がないことについては悩んでしまう。大差がないならどちらでも良いのだから、鉛筆を倒して決めても問題ない。

しかし、不安が強い人は、そのちょっとした差で悩んでしまうのだろう。相談でいらした人のそうした質問に、「どっちでも良い」という答えではあまりにも不親切だろう。

メリット・デメリットがはっきりあるなら、その両方をそれぞれについて説明し、その上で考えてもらうが、最終的に決めるのは相談に来た人である。

例えば、部活選び。テニス部と卓球部とどっちが良いか？本人が好きな方を選べばよいのだが、選べないときどうするのか？テニスで必要な経費と卓球で必要な経費の比較、部活として楽しみたいのか、真剣に選手として頑張りたいたいのか、部活のレベルと本人の部活に求めるものなどもしっかり聴いて行かねばならない。そもそもそうし

たリズム感が必要なスポーツが向いているかどうかも検討事項になる。決め手が見つければよいが、見つからないときは、この諺を伝え、差は多少あっても、本質的には変わらないことを伝えてみる。どちらも道具の面を使って玉を打ち返すスポーツだし、シングルとダブルスがある。コートの大ささ、走る量は異なるし、点数の数え方も異なるが、どちらも似たスポーツではあるのだと。

五十歩と百歩は確かに五十歩の違いがある。人の歩幅は慎重×0.45と言われている。160 cmの生徒なら、72 cm。72 cm×50=3600 cmつまり36mの差が出来ることになる。これを大きいととるか小さいととるかは、人それぞれかもしれないが、目標とする距離が長ければ、36mは大した違いではない。故事では逃げたことに変わりはないからということなので、それを借りれば、歩いたことに変わりはないということになる。似たようなことで、大差がないなら、あまり拘らないことが生きやすさにつながる。

英語では・・・

As good twenty as nineteen.  
(二十も十九も似たようなもの。)

A miss is as good as a mile.  
(小さな失敗も大きな失敗も、失敗であることに変わりはない。)

#### <疑っては思案に能わず>

物事にあまり熱中し過ぎると、かえって冷静な判断が出来なくなるということ。心にゆとりを持つことが大切だということ。

これは、どんな人にも言えることかもしれない。ついつい何かに熱中してしまって、大事なことを忘れて、約束に遅れたり、他のことに気持ちを向ける余裕が無くなったり。熱中する物によっては、多大な迷惑を掛けたり、自分自身が失敗の道をたどることもある。

集中すると周りの人が声を掛けても聞こえない。その為に親に怒鳴られてしまう子もいる。しかし、集中することで素晴らしい仕事をする子もいる。寝食をわすれてしまう、トイレに行くのも忘れる、そんな集中力の子もいる。それを否定したくはないが、出来れば、どんな時でも、周りが見えるように、集中し過ぎないことが出来ると、もう少し楽になれるかもしれない。そんなことを伝える時にこの諺を使っている。

### <碁で負けたら将棋で勝て>

一つのことで失敗しても、くよくよせずに別のことで取り返せという教え。

一度失敗すると立ち直れない子がいる。高校受験では、先生方が失敗しないように導いてくれるため、殆どの子が無事合格する。

高校に入ったとたんに、自分の力が周りの子に比べて劣っていると感ただけで、学校に行けなくなってしまふ。勉強だけが全て、成績だけが全てだと思っているから立ち直れなくなってしまふのだ。勉強がダメなら他のことで頑張ればよい。

何か一つでも得意なものを見つけられる子は幸せである。しかし、それを見つけて

あげるのも親の務めかもしれない。勉強が苦手でも、料理が得意なら、スポーツが得意なら、工作が得意なら、おしゃべりが得意なら、何でもよいではないか。

ドラえもんに出てくるのび太君のように、勉強はからっきしでも、優しくて、あやとりや早抜きが得意で、愛すべきキャラになれば、明るく前向きで、周りの人を温かい雰囲気にしてくれるだけで、愛されるようになる。

折り紙が得意な子もいた、絵が得意な子がいた、将棋が得意な子がいた、スポーツが得意な子がいた、演技が得意な子がいた、歌が得意な子がいた、ダンスが得意な子がいた。得意なものはないけど、素直な子がいた、優しい子がいた、笑顔がかわいい子がいた。何でも良い、1つ得意なものが見つけれれば、輝ける。

こんな事を伝える時にこの諺を使っている。

### <尽く書を信ずればすなわち書なきに如かず>

どんな書物も完全ではない、批判の目が必要であることのたとえ。書物を読むときに、書かれていることを全部丸呑みするのなら、かえって読まない方がよいという意から。原義では「書」は『書経』を指したが、現在では一般の書物の意味で用いられる。

出典 孟子

最近「書」ではなく「ネット」かもしれない。ネットで何でも調べ、その情報に振り回されている人が結構いる。そういう人には、この諺がぴったりだと思っている。

### <琴柱に膠す>

規則に拘って融通がきかないこと、臨機応変の処置ができないことのため。琴柱を膠で固定すると、音の調律ができないことから。

琴柱＝弦を支えるため琴の胴に立て、位置を変えて調律する道具。膠＝魚などの骨や皮を石灰水に浸してから煮て濃縮し、冷やして固めた者。接着剤として用いる。

出典 史記

最近では中学校で琴を習う学校もあるようなので、この諺を理解してもらいやすくなった。琴柱を動かさないようにしたら、音が安定するのではと思う人もいるかもしれないが、1つ1つの弦の音程は決まっているので、その調整のため、琴柱は動くようにしておかねばならない

バイオリンの駒は外せるが、動かすことは殆どなく、弦の張の強さで調律する。そして抑える位置で音階が生まれる。つまり、琴柱はバイオリンの弦の張を調整するねじの様な役割である。従って動かないと調律できない。

このことから、琴柱を固定することが、融通が利かないということに通ずるのである。

マニュアルに頼る人が増えてから、臨機応変に動けない人も増えた。教わっていないことはできないというのでは学びは深まらない。試行錯誤や、見て学ぶことが求められていた時代には、誰も教えてはくれなかった。自ら想像し、創造していく力は、学んだことの般化から生まれてくる。

見聞きしたこと、体が覚えたことに加えて、発想の豊かさが臨機応変につながる。発想の豊かさには丁度琴柱の様に、自由に動く思考が必要だ。

### <子供の喧嘩に親が出る>

つまらないことに余計な口を出すこと、大人げないことのため。子ども同士他愛のない喧嘩に、それぞれの親が干渉すること。

この諺が実践されるケースが増えている。子ども同士がしっかり喧嘩できれば良いのだが、最近の子どもたちは、喧嘩せず、どちらか一方がやられる。そしてやられた側は親に訴える。或いは親が気づいて問い詰め、相手の言動をすることになる。可愛い我が子に対し一方的とはいえ、ちょっとした意地悪や悪口や仲間外れにするなどと言うことがわかれば、親は黙っていない。まずは学校に電話し、担任に確認する。担任は「双方から話を聴きます。」とか「調査します。」と言って確認に入る。その結果に親が納得すればよいが、納得できなければ、更に親の腹立ちがヒートアップする。そして、校長室に怒鳴り込みなどと言うことも間々ある。一方、親がこんな風にどんどん出ることで、子どもは引くに引けなくなる。「大したことではなかったのに・・・。」と思う子もいるし、「そうだそうだ、あんな奴、責められればいいんだ！」と思う子もいるだろう。どちらにしろ、問題は子どもから離れて行ってしまふ。そのため、ますます自分のトラブルを解決する能力を失っていくことになる。

いじめに対しては、放っておくわけにはいかないが、ちょっとしたすれ違い、勘違いなどと言うことも多々あるのが子ども同士の関係である。まずは本人に解決させてみよう。解決方法を一緒に考えてあげよう。それでもダメな時はそれこそ親の出番になる。

### <子に過ぎたる宝なし>

どんな宝も子どもには及ばない、子どもは最上の宝であるということ。

子どもは宝だということをあまり大きく言うと、子宝に恵まれない方を傷つけることになるのかもしれないが、子どもを育てているお母さん、お父さん向けにこの諺を使っている。生きることに必死だと、つい子どものことは二の次にしてしまう。金銭的に余裕があれば、物で埋め合わせをする保護者もいるが、子どもたちが欲しいのは、物ではなく、寂しさを埋めて欲しいという願いである。離れていた時間の分だけ、休みの日や空いている時間に、しっかり話を聴いてあげたり、遊んであげたり、スキンシップをとったりできればよいのである。どんなにお金を稼ぎ、豊かな暮らしになったとしても、子どもとの関係が醒めてしまって、子どもが保護者との関係を切ってしまったら、後からいくら悔やんでも始まらない。

今、目の前の子どもに、精一杯の愛情を注げれば、子どもは、反抗期も思春期も超えて、保護者との良い関係をいずれ持てるようになる。子どもを育てることは大変だし、責任も重いが、子どもを育てながら親

も育つし、子どもの成長を見て行けるしあわせも、いつか感じられたらと、この諺を伝えている。

### <子の心親知らず>

親は我が子の本心を案外わからないものだということ。また、いつまでも幼いと思っていると、成長している子どもの気持ちを理解できないということ。

前述の様に、子を宝と思って一所懸命育てていても、子どもの心がわからない事は在る。小さい頃は速く大きくなれと思っているのだが、大きくなっているのに、いつまでも子どもだと思って対応していると、厳しい言葉を浴びせられることも良くある。「親の心子知らず」という諺に対する、子の反撃のようなこの諺は、思春期の子を持つ親に主に教えている。

親が思っているほど子どもはいつまでも、親の助けが欲しいとは思っていない。子どもが親をうるさがったり、うっとうしがったりするように育てられれば、むしろ子育ては成功だと伝える。

### <子は親を映す鏡>

子どもの振る舞いを見れば、どんな親かを知ることが出来るということ。また、子どもの考え方や行動には親の価値観が反映されるということ。

小さいころから、親の真似をしてそだててきた子どもなのだから、親に似るのは当たり前である。父親がテレビの前で寝そべ

ってみていると、同じ格好をして子どもが見ているという光景に出会った母親は案外多い。

食べ物の好みが親と同じになったり、物の言い方や行動が親に似ることも多い。大きくなると娘と母親の声が電話では区別がつかないなど言うことも良く聞く。子どもの言動に、ハッとしたことがある親もいる。

だからこそ、親は自分の言動に気をつけねばならない。一所懸命働く姿をみせること、言葉で伝えるだけではなく、実践して見せることで、より上手く伝わる。言葉遣いや人との関わり方、食事の癖、行儀や姿勢など、良いお手本を示せる大人であることが求められている。

英語では・・・

As the old cock crows, so crows the young.

(親鶏が時を告げるのと同じように、若鶏も時を告げる)

## 出典説明

### 孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の言行を門人が編纂したもので、「大学」「中庸」「論語」と共に四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、霸道（武力による政治）を否定して王道（人徳による政治）を提唱している。

### 史記・・・百三十巻

中国時代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体<sup>きでんたい</sup>」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。